

竹村嘉晃著『神霊を生きること、その世界』

石井達朗

民族誌的に考察するとかなり複雑、社会文化的に見ると広範囲にわたり、宗教人類学的に調べると奥深い。南インド・ケーララ州を代表する、そのような神霊祭祀テイヤムに外国人の研究者がアプローチする場合、どのような方法が求められるのだろうか。テイヤム信仰は、ヒンドゥー教がケーララに流布する以前からあったドラヴィダ文化の影響が強いと言われているが、だからと言ってこれを稀有なドラヴィダ文化の遺産としてフォークロア的な叙述をしても充分ではない。テイヤムという祭儀は、まさにそれが「稀有で貴重な文化遺産」として認識されるに従って、インドの政治・経済・社会・文化のさまざまな変容の波をかぶることになる。

このように移りゆく現代世界を背景に、祭祀テイヤムとどう向き合えばいいのか。著者はまずテイヤムを取り巻いて複雑に錯綜する現在の状況について、以下のような認識を語る。

こうしたテイヤム祭儀を取り巻く「現在」は、グローバル・マーケットへの通路を提示するだけでなく、村落レベルにおける個々の実践さえ、グローバルな価値の表象を含んでいることを示唆している。テイヤム祭儀のアーナは、複数のアイデンティティや利害関係、カースト、政党政治、ローカリティ、資本主義経済、観光産業、芸術家などの主張が重層的かつ交錯した場となっているのである。ではこのような文化的パフォーマンスの多面的な「現在」を捉える際、われわれは、何を基軸に分析を進めるべきなのだろうか。(34-35頁)

静止画像を分析するように、微細な事象を列挙して異文化の祭祀研究をするというのは（それが初期段階では必要な作業であるにしても）研究者が陥りやすいことである。本書は、最初から最後までそのような研究とは一線を画している。本書がもともと博士学位請求論文を母体にしていても関わらず、類書にない新鮮な輝きを放っているのは、「何を基軸に分析するのか」という問題意識が本書全体を貫いているからである。そしてその基軸とは祭儀の実践者である者に密着し、その「生」のトータルなあり方を流動する現代インド社会を背景に活写するということである。本書は、綿密で周到なアカデミックな態度を維持しつつも、

インド社会の底辺で生きる実践者を揺れ動くダイナミズムのなかに捉える生き生きとした筆致が印象的だ。これだけ高い学術的な成果を挙げながら、同時にそれが魅力的でリーダブルなものになっているのは、著者が本書の全体をとおしてどのような視座を維持する意思があつてのことだろう。

本論が目指すのは、人・モノ・情報・資本がグローバルに流動する現代インド社会において、テイヤム祭儀というローカルな文化的パフォーマンスとその実践者である個人に焦点をあてながら、彼らの生のありようがどのようなものから、どのようなものへかわりつつあるのかを理解することである。すなわち、現代ケーララ社会において、カーストの伝統的職業を担いながら生を営んでいる旧不可触民階層の人びとと祭儀を取り巻く事象を、「現在」という枠組みのもとで民族誌的に検討することである。(37頁)

本書の中核を成す第1章「神霊になること」は、カーストや親族関係を念頭におきながらテイヤム実践者の今現在のあり方と祭儀の次第を明確な言葉で語る。テイヤムでは化粧や装束などの視覚的な要素が重要な役割を果たすが、そのことに関しても詳細でわかりやすい叙述がある。テイヤム実践者とその周辺の人々に密着し、できる限り詳細なフィールドワークを先行研究に照らし合わせることにより達成される、いわゆるエスノグラフィックな色合いの濃い章ではあるが、しっかりとした学術的な内容を伝えながらも、無味乾燥な叙述には陥っていない。祭儀の次第の詳細を語る客観的な視点が必要とされる場合にも、著者の感性が生きている。

古典芸能の伝承にしばしば見られるように、ある種のシステムティックな教授法があるわけではなく、旧不可触民層のなかの特定の家系に継承されるテイヤムは、どのようなプロセスを経て学習されてゆくのだろうか。

祭祀シーズンの七～八か月間、学習者は親族を中心とした実践者グループに同行し、祭儀会場を転々としていく。祭儀の場において、彼らは年長者の手伝いをしながら、祭儀に関するさまざまな知識や技芸を実践から学んでいく。それらは、装束を飾りつける装飾の作

り方からはじまり、装束の着衣法、太鼓演奏、化粧の順に進んでいく。

(中略)

祭儀の習得が十全になると、学習者はテイヤム実践者として活動する。テイヤム実践者となった者は、自分が属するグループだけでなく、他のグループに呼ばれて祭儀を担うこともある。さらに父親やおじの引退、祭主側の意向によって選ばれると、主神のテイヤム神を担うようになる。(97頁)

このような祭儀の核にあるテイヤム信仰も、ローカルなコミュニティの歴史的、社会的、宗教的なコンテキストにおいて生きながらえてきたことに加えて、現代社会の大きな波をかぶるなかで少しずつ変貌を遂げざるをえなくなる。肥大化する多様なメディアとの接触、ふくらむ観光や政治の思惑、それを誇る(守る)べき伝統芸能・貴重な伝統遺産として捉えようとする視座、そして「芸術」として捉えたり「研究対象」とするアプローチなど、これまでなかった眼差しの流入である。

本書の特色のひとつは、そのような現代社会の流れのなかで、テイヤム祭儀のあり方そのものが、変容することを余儀なくされている状況を冷静に詳述していることである。例えば、電子メディア、とくにウェブサイトをとおしたテイヤム表象にまで言及し、次のように語られる。

テイヤム祭祀という民族文化の表象のアーリーナは、ダイナミックな文化生産の磁場であり、たえず生成や変転を繰り返している。もともと信仰という生活世界に埋め込まれていたテイヤム神は、民俗芸術として外向けに表象されるようになったことを契機に、操作する主体が多様化し、表象行為も複雑化、高度化するようになったのである。

(中略)

テイヤム神は、祭儀に顕現するだけでなく、民俗芸術や観光資源として利用され、他者によって物語られ、かつ演じられることによって再提示されてもいる。(187頁)

最後の二つの章はそれぞれ「稼ぐこと」「受け継ぐこと」と題され、ジェイという若い世代のテイヤム実践者をとおして見る経済的な状況と、継承される現実が語られる。本書全体をとおして言えることだが、とくにこの二つの章においても、現地の人々に寄り添う著者のミクロの観察眼と、マクロの思考のバランスが絶妙である。とくに400以上あるといわれるテイヤム神のなかでもこのところ最も頻繁に祭儀が執り行われるムッタパン祭儀にジェイが自ずと関わるようになり、

それに伴い、裕福な暮らしをするようになるプロセスを叙述している箇所などは、低カースト層に生きる祭儀実践者の変容の一断面を知るうえで非常に興味深い。ローカル神の霊媒としての仕事に旧不可触民層の若者が取り込まれる過程のなかに、旧来とは異なるあり方が見えてくるのである。

その行為は、村落や親族といった伝統的な社会的関係やその道徳的な規範に必ずしも規定されているわけではない。また、宗教的シンボルが大衆のナショナリスティックに、さらにはヒンドゥー至上主義へと煽動していくような、現代インド社会においてこれまで指摘されてきた事象とも異なるものである。むしろその行為は、急速な経済発展を背景に、社会環境や生活様式が急変するなかで、現代社会を生きる人びとが新たに抱える社会的不安を解消したり、消費社会化の浸透により個人的な欲望を追及する営為といえる。(254-255頁)

かくして「祭儀」「信仰」「宗教」のあり方の今世紀における変容は、それらの言葉がもたらす意味や概念さえも旧来とは少しずつ違ったものにしてゆくのではないかと予感させられるのである。たんなる民俗学的な儀礼研究ではなく、それを執り行う今を生きる人々に寄り添った本書は、その変容を清新な眼差しで見つめている。これだけ学術的な成果を踏まえながらも、終始「読み物」としての魅力を失わない本書を、インド研究者はもとよりそれ以外の多くの人たちにも薦めたい。

(風響社、2015年5月刊行)